

ドナルド・キーン
徳岡孝夫訳

日本文學史

日本文学史 近世篇 上

© 1976 検印廃止

昭和 51 年 12 月 10 日印刷

昭和 51 年 12 月 20 日発行

著 者 ドナルド・キーン

訳 者 徳岡孝夫

発行者 高梨 茂

印 刷 三 陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2-1

振替 東京 2-34

目次

序	近世の日本文学	5
一	俳諧の連歌の登場	14
二	松永貞徳と初期の俳諧	33
三	談林俳諧	64
四	蕉風への移行	91
五	松尾芭蕉	119

六	芭蕉の門人	205
七	假名草子	249
八	井原西鶴	275
九	浮世草子	357
	訳者あとがき	378

日本文学史

近世篇上

序 近世の日本文学

徳川期の文学の特色は、なににもまして、それが（武家階級をも含めて）民衆のものだったという点であろう。それまでにも、名もない作者の手になる詩歌や散文は、日本にも決してないわけではなかった。それらの中には、文学的な価値のあるものもあったし、あるいは宮廷独特の文学ジャンルと思われているものの中にも、その根源をたどれば民衆にもてはやされた俗謡、俚謡のたぐいにつながるものはいくつかあった。しかし、諸外国の文学、ないしは一六〇〇年以降の日本の文学と比較するとき、それまでの日本文学は、その作者といい、読者や作品の性格といい、やはり圧倒的に貴族のものであった。

新しい文学の勃興が、政治的な意味での新しい時代の幕開きとはつきり平行を示すなどという偶然は、世界の歴史の中でもめったに起らない。西暦一六〇〇年——つまり「天下分け目」の関ヶ原の役と軌を一にして起った新しい文学は、そういう意味できわめて例外的だったといえるだろう。

時代をもう少し進めて、関ヶ原の役の十年前にまでさかのぼると、以後二百七十年間の徳川時代にやがて開花を迎える詩歌、散文、演劇のうちほとんどすべてが、家康が全国制覇の足がためをしているまさにその時期に、ほぼ決定的に方向づけられたということさえできる。そして、この時代についてなにか一つ、もっとも重要な特長をあげるとすれば、それは印刷術の導入である。印刷という技術を抜きにしては、以後の民衆の文学は存立しえなかったからである。

それ以前の日本でも、印刷は、すでに八世紀いらい行なわれていた。七七〇年に稱徳天皇の命によって「陀羅尼」が刷られ、百万塔に納められた証拠が現存している。その後、ときどき経典類が印刷されている。だから、 ページを一枚の板木で刷る印刷の技術は、決してすたれてしまったわけではなかった。ただ、印刷の対象が、中国のように経典以外のものにまで拡大されることがなかっただけの話である。

『古今和歌集』や『源氏物語』のような古典、あるいは『日本書紀』のように漢字で表記されたもののまでが、なぜ写本という形でしか伝えられなかったのか、という点については、いまだに完全な説明が与えられていない。あるいは作品に対する需要がごく限られたものだったため、たとえば高くついても書写するほうがよかったのか、または印刷と経典のイメージがあまりにも密接に結びついていたために、仏教関係書以外のものの印刷を思いつかなかったのか、あるいはその複合的なものだったのであろうか。

いや、手間もかかり高価でもあった写本のほうを選んだのには、おそらくもっと審美的な配慮

があつたはずだと考えられる。すなわち、作品が書かれている書体と挿絵が、その文学作品の内容と一体不可欠のものと考えられていたために、そうした美に欠ける印刷本は、下座のない芝居のように無味乾燥なものとされたのだらう。理由はともかく、日本文学の古典中の実に多くの作品が、まかり間違えばあつさり戦火の犠牲になったかもしれない一部か二部の写本によつてからも命脈を保つて今日に至つた事實は、それ自体、驚くべきものである。

仏教と関係のない印刷本の皮切りは、一五九一年に出た、今日の用字便覧に当たる『節用集』である。室町時代の中期に編輯されたこの本は、商都・堺において商人の手によつて上梓された実用書の嚆矢^{こし}だった。ほぼ同じころ、天草で布教をしていたイエズス会の神父たちが、ローマ字の活字を使って印刷を始めていた。その中には『平家物語』をはじめ二、三の古典も含まれている。

堺といふ天草といふ、このような印刷術の興隆は、自由闊達かつ進取の氣象に富んだ當時の時代精神を反映する現象といえるのだが、それらはいずれも直接的な形では、十七世紀以降の文学に大きい貢献をした印刷術の発展にはつながらなかった。

活字がはじめて日本に招来されたのは一五九三年、つまり秀吉の最初の朝鮮出兵後で、朝鮮から後陽成天皇に奉られたものであつた。中国では、十一世紀にすでに活字が使用されていた形跡があるが、その技術は朝鮮に渡つて改良を加えられ、とくに一四〇三年に活字の鑄造技術が発明されてからは長足の進歩をとげた。もとより、活字印刷機が天皇に献上されたのは、実用品とし

てよりも単に珍しいものだったからだろうが、後陽成帝はその年のうちに実際にその機械を使って、儒書『古文孝經』を印刷するように命じている。

さらに四年後の一五九七年には、朝鮮渡来の機械を真似た日本初の印刷機がつくられた。ただし、鑄造技術がなかったためか、活字は銅ではなく木製だった。そして、一五九九年には、この機械を使って『日本書紀』の第一巻が印刷されている。

まもなく印刷は、当時の金持の余技や慰みの一つになった。医書あるいは儒書や仏典、または小説、日記、詩歌、辞書、史書などあらゆるジャンルの文学作品が印刷に付された。ただし、印刷された部数は非常に少なく、百部を超える場合はあまりなかった。このような印刷の多くは、今日では後陽成、後水尾両天皇や秀吉、家康などの命によって行なわれたとされていることからわかるように、もっぱら贈り物としての希少価値が先行しており、決して市販を前提にしたものではなかった。

当時の刊本のうちもっとも美しいものは、京の豪商、角倉素庵（一五七〇～一六三三年）の依頼で本阿彌光悦（一五五八～一六三七年）が板下を書き、装飾にも心をくだいた、いわゆる「光悦本」だろう。光悦によって、謡本をはじめ『方丈記』『新古今和歌集』など、さまざまな古典が美しく複製されたが、なかでも絵入りの『伊勢物語』刊本（一六〇八年）は精彩を放っている。

市販を主目的としたらしい本が刊行され始めるのは一六〇九年からで、この年には、中国の詩文の代表作を収めた『古文真寶』が上梓されている。刊本への需要がようやく高まり、京、大坂

あるいは江戸などの大都會で、利にさとい連中が印刷に目をつけ始めたのであらう。

印刷は、こうして、特権階級の慰みから民衆を対象としたビジネスへと移行するのだが、ただ、その過程において、せっかく開発された活版印刷を見限り、板木による印刷に逆行しなければならなかった。活字のほうがページまるごとの板木を彫るよりも高くついたから、あるいは百部以上の印刷には適さなかったから——などという説明が、これまで、この逆行現象に対して与えられてきたが、いずれも十分に説得力のある説とはいいがたい。ほんとうの理由は、この場合もまた、もっと審美的なものではなかったかと推測されるのである。

日本語の文章、とくに平仮名で書かれたものは、筆の運びのままに、字がつぎからつぎにと続いている。一字一字が独立し、離れ離れになっている漢文とは、その性質がまったく違う。だから、活字によって印刷された仮名文は、実際に筆で書かれたものにくらべて、当時の人々の目にはきわめて不自然、不格好に見えたのだろう。しかも仮名には、字によって細長いものと短いものがある。活字は全部同じ大きさ、長さなのだから、この点でも不適當である。なんとか美しく見せようと、二つないし三つの仮名を組み合わせて一字にすることも考案されたが、やはり望ましい結果は得られなかった。

挿絵のこともある。十七世紀初頭にもっとも喜ばれたのは、「奈良絵本」の影響もあって、美しい書体で書かれ、ふんだんに挿絵を使った本であつたらしい。文章を活字で印刷したものに挿絵を加えることも、もちろん不可能ではなかったが、そうなることやはり、文章と絵をまとめて一

ページごとに一枚の板木に彫ってしまいうほうが簡単である。そして、この板木単位の印刷技術が一六二〇年代にひとたび確立してしまうと、それからあとの多くの日本文学は、もう挿絵なしには考えられないほどになってしまった。

一六二〇年代に商業印刷が大躍進をとげたことは、武家階級が文化的なものに対して強い関心を抱き始めたことと密接な関係にある。十七世紀のごく初期の文学作品には、たしかに貴族の手になるものが多かったし、最近までは烏丸光廣（一五七九～一六三八年）が、そのうちのかなり多数の作品の作者に擬せられてきた。近頃では、これに対する反論が有力だが、それでもやはりこの時期においては、日本文学の上に貴族が持っていた余光は無視できないものがあつた。しかし、初期を除く十七世紀全般の日本文学について言えるのは、その作家も読者も、ほとんどが武家階級に属していたことである。

長い戦火が終わって、久しぶりに平和が日本を包んだ。支配者は、武士たちに文の道を志すよう奨励した。彼らは、血なまぐさい合戦に慣れた武士たちが中央政府に叛旗を翻すのを恐れたのかもしれない。そのため、侍たちがあつたエネルギーを発散しうる場所としての遊里も、黙認ないしは積極的に建設されたほどだった。まもなく武家階級の文弱化と頽廢が為政者を悩ませるに至るのだが、一六二〇年代においては武士たちによる文化への参加は、歓迎すべき行為でこそあれ、抑圧すべきことではなかつたのである。

武士のエリートである大名たちは、こぞって家臣の中に文化人を加えた。ストーリーテラー兼

詩人としての御伽衆がそれで、彼らは、ときには主君の武勲を物語に仕立てるという意味で、作家でもあった。その代表者は『信長公記』を書いた太田牛一（一五二七～一六一〇年）であろう。彼は、信長と秀吉の双方に御伽衆として仕えた人物だった。御伽衆はまた、主君のお慰みに、軽いユーモアのある物語を創作する役割も担っていた。

徳川時代を代表する詩型としての俳諧も、やはり大名を取り巻くサロンの所産であった。長い、固苦しい連歌の会が終わったあとの一夕を、出席者たちはほっとくつろぎ、即興性と諧謔を主体とした俳諧の中におかしみをさぐり合うわけである。十七世紀初期の俳諧師の中でもっとも重要なのは松永貞徳だが、彼は武家の名門に生まれ、大名である細川幽齋に仕えたという意味で、典型的な「時代の子」だった。

文学の主流が武士の手から町人に移るのは、時代がずっと下って十八世紀になってからである。もっとも、演劇だけは例外で、歌舞伎と浄瑠璃の誕生によって、町人の嗜好は十六世紀の終盤から、早くもこの分野においてだけは、その傾向を見せていたのであった。

徳川期文学は、ふつう前期と後期に大別される。前者は一六〇〇年から一七七〇年に至る、上方が文学の主たる生産地だった時期。後者は一七七〇年から一八六七年までで、中心が將軍のひざもとである江戸に移った時期である。

文学の様式という面では、和歌、俳諧、小説、演劇に区分することもできる。ごくまれに、西鶴のように二つ以上のジャンルにわたって活躍した作家もいなかったわけではないが、一般的に

は、右の四区分は、ほぼ厳然と確立していたと言っても誤りではない。その意味から、私も、一七七〇年代で徳川時代を一応前後期に分けはするが、そのおのおのについては、年代を追うよりむしろジャンル別に記述を進めていきたいと思う。

徳川時代は印刷技術の発達に加えて国民のあいだの文盲度が低下したため、次章以下で取り扱った作品以外にも無数のものが出版された。それらの中には文学としての価値を論ずるに足りないものもあるが、一部、とくに随筆については部分的に秀でたものがあり、それは優れた文学としての随筆を論ずるうえでも重要なものといえよう。ただ、人間が一生のあいだに読みうる作品の量は限られているし、近世の随筆を全体として見てみると、必ずしも広汎な研究に値するほど水準の高いものとも言えない。同じような理由から、儒者の書いた作品の中にも時折り文学的評価に耐えうるものが認められるが、それもまた、一応、この文学史が取り扱う対象の外に置きたいと思う。

近世文学のもう一つの大きな特長は、三つのはっきりした山を持っていることである。すなわち元禄（一六八八～一七〇三年）、天明（一七八一～八八年）、文化文政（一八〇四～二九年）で、この三時期には創造力に富んだ作家をはじめ各ジャンルの藝術家が集団をなして輩出し、相互に刺激しあって壮観を呈している。この三つの山以外の時期は、いわば谷だが、それでも生産される文学の量が落ち込んだというわけではなく、単に質的な意味での谷というにとどまる。

現存する平安期の文学を全部読破することは不可能事ではないが、近世文学はその量が膨大す

きて、一人ですべてをこなすわけにはいかない。研究者にもっとも勧めたい研究法は、前記三つの山に属する作家たちをまず分析し、つぎにその前後の時代に位置する作家のうち研究に値するような人々を拾い出すという方法である。

次章以下では、それぞれの作品の歴史あるいは哲学的な背景については、その折り折りにごく軽く触れるのにとどめた。さらに深く、個々の作家や作品について研究したい人には、各章末の参考文献を手引きにされるようお勧めしたい。

一 俳諧の連歌の登場

連歌という文藝型式は、もともと宮廷での優雅な言葉遊びの中から生まれたものであった。連衆は、それぞれ、示された先行句に自分の句を付ける。長句には短句を、短句には長句をと交互に付け合う即興の味、そしてそのさいの連衆おのおのの機知、頓才が連歌の真骨頂である。前の句が奇想天外、文字どおり二の句が付けかねるものであればあるほど、洒落そのほか言葉の遊びのテクニクを駆使して巧みに付句を付けた人の機略応変の技術が称揚されるのである。⁽¹⁾

しかし、連歌発生期の、単に機知の誇示を狙って長・短あるいは短・長と付けるだけだった短歌合作は、十五世紀から十六世紀にかけて、もっと本格的な連歌の名人上手が何人も出たことによって、はるかに藝術的なものへと飛躍をとげる。その長さも、複数の連衆が付合^{つけあ}いしながら張行する百句、ときには千句にも達する鎖連歌へと発達をとげる。同時に、それまでの洒落、見たてなど卑俗な連想の巧みさを中心としてきた付合^{つけあ}いの妙が、言葉の遊戲の域を脱し、しだいに前句の風情、余情を承けた付句が評価されるようになる。そして連歌の名人や優れた連歌師た